

パネルディスカッション

作家 夏山 かほる
九州産業大学地域共創学部教授 末松 剛
衣紋道山科流若宗家 山科 言親
同志社大学文学部国文学科助教 大山 和哉
同志社大学文化情報学部助教 深川 大路
司会 同志社大学文化情報学部教授 福田 智子

福田 今日のイベントの最後、パネルディスカッションを始めます。ディスカッサントとして夏山かほるさんを、お呼びしています。夏山さんは日経小説大賞受賞の作家で、受賞作が『新・紫式部日記』、その次に『源氏五十五帖』という小説を書かれています。作家の目から見た宮廷文化というもの、4人の方々のご講演をどのようにお聴きになったのかからお話しいただきたいと思います。いかがでしょうか。

夏山 令和元年度に小説家デビューしまして著作は2冊、今、3作目を企画中ということです。平安時代ものという時代小説の中では、近年では珍しいジャンルの作品を書いています、第3作目も、いくつか企画がありますが、編集者とやりとりしていますと『源氏物語』や紫式部とか、実在の人物にかかわるテーマが、ウケがいいのですが。そんな中で本日、「宮廷文化のリアル」というご講演を聴かせていただきまして小説を書く点から勉強になった次第です。

4人の先生方からのご発表を伺っておりますと、宮廷文化というのは多角的な総合的な広がりをもつものであると実感いたしました。そんな中で歴史学、科学、学芸文化、現代的なツールを使った新しいアプローチを、それぞれの観点から宮廷文化の実相に迫るご発表だったと思っています。

宮廷文化は一言でいうと「決まり事」の集積なんだけれども、なんで決まり事がつくられ、それがどんどん大規模になっていき、現代に伝わってきているのかと思って聴いておりました。

福田 そうですね。決まり事が多いということは確かに伺ってまして印象に残ったことです。「型」がある。私、和歌を研究しておりますけど、表現においても和歌の決まり事があるんですね。大山さんのお話で和歌が何たるかを、よくご説明くださったのではないかと思います。深川さんの計算機科学で「型」というものが、ある程度、抽出できる研究も行われていまして「本歌取り」とか、文字列の一致度を見ればデータの中から拾い出せることがあって、案外、データが集まると計算機科学は文化を解明するのに有用な視点を授けてくれるのではないかと思います。大山さん、「型」に関して、他の方々のご講演をお聴きになって、印象深かったことはございますか？

大山 そうですね。「型」というと堅苦しいという感じがしますが、「有職故実」も「型」、即位礼の儀礼に関しても「型」があって、それが時代に合わせて変化していくこともありますよね。その中で、一定の枠を外れていかない、芯になる部分はゆるがないというのが「型」だ、という言い方になるのかなと思

いました。

「型破り」という言葉もありますが、「型」を破って踏襲していくということも、はじめに「型」がなければ成立しない。これは冷泉家のご当主でいらっしゃる冷泉為人先生がおっしゃっていた言葉の受け売りですが。「何でもいい」となると文化ではない、みんなが違うことを考えている中に共通理解の文化はできてこない。みんなが一人ひとり、勝手に、自由に生きていけばいいという社会もいいですけど、我々は同じ生活を送る中で、一定の共通理解を自然と持つようになるものだと思います。日本人の国民性とか、京都の人の性格とか、いろいろなくくり方があると思いますけど、複数の人が集まって生きる時に、どうしても共有される価値観が必要になるし、必要とっていなくても、勝手に生まれてくるものです。なので、無理矢理に形を決めていって、そこに人を嵌め込んでいくというよりは、自然と生まれてきた共通の価値観を「我々はこういうことを考えていますよね」と後から人々が認識して大事にしていくのが「型」なのではないでしょうか。他の先生方のお話を聞いて、そう思いました。

福田 「型破り」になるためには「型」がないと破れませんものね。儀礼ということでお話をすることになりますと、どういう研究対象を選んでいくか、そこに内面が出てくるところがありますが、そういう点からいきますと、これらの研究者のお話の内容が、その方の人格も表しているような気もいたしました。末松さんなんて、見るからに儀礼をなさりそうな会場

からのご質問を受けておられるようなので。

末松 一枚、一幅の即位式絵図の中に、江戸時代ですから、当時800年の歴史が込められている。宮廷文化の所産とは、そういうものなのかなと。私たち見る側がスイッチオンにするとあっという間に平安時代のものが実際に目の前に現れる。それを伝えてきたのが宮廷社会ではないかと、宮廷儀礼を研究しながら感じています。

会場からの質問に対してですが、平成、令和の即位礼をしつかりと御覧になった方からの質問だと思いますが、「即位式の時に天皇が着られる礼服が赤い色ということでしたが、現在は黄色ではないですか？」と。「黄櫨染の御袍」といいまして、今日紹介しました弘仁11年(820)の嵯峨天皇の詔の中に、別の用途として黄櫨染の御袍が初見しております。

「御帳台がないのはなぜか？」ということもあわせて申しますと、黄櫨染の御袍も御帳台も、即位礼に登場するのは明治天皇の時からです。中国を模倣した色彩が濃い要素を極力取り払って、日本の伝統的な即位の礼を追求しようとして、それが行き過ぎた部分もあったりして、明治天皇の即位式の時には地球儀が飾られたりするわけですが、その時に^{こんべん}袞冕十二章でなくなってしまう。それに代わる和の文化で、かつ同じくらい歴史を誇るものが採用されたというのが、近代以降のあり方なのですね。今回、あえて近現代の即位の礼は取り上げなかったのですが、いろいろ変わっているところはありますし、変わってないところもあるようです。

質問を拝見しまして、歴史的な目で見て、お話を聴いていたのだなどと、嬉しく思っています。

福田 過去の文化、過去に生きた人たちが、つむぎ出してきた文化を私たち現代人が知ろうとすることは、まさに過去の人たちとのコミュニケーションであるというところですね。そういう点でさまざまな角度からの分析、知ろうとする心が重要だなと感じます。山科さん、ご質問のお答えとかがございますか？

山科 「衣紋道の山科流の他に高倉流と聞きましたが、どういう違いがあるのでしょうか？」と。「型」という話に通じることではないかと思いますが、「こういう時にはこうする」という作法とか、いろいろ細やかに家の説などが出てくるわけですが、時々による解釈の積み重ねがあり、こと装束に関しては、まずお仕立て、縫製の違いがあります。また、あれだけの大きな大袖の装束ですから袖の畳み方に違いがあるなど、着装にも細やかなところに違いを見いだしていき、それが一つの流派として確立していきます。例えばお茶とかも、もともとは同じようなやり方、自由なやり方があり、それが人づてに伝えられていく中で徐々に一つの「型」ができてくるわけであって、後世の人から「この人は流祖ではないか」というような解釈もなされ、また歴史も紡がれていく。それが人間の営みの面白いところかなと思うわけですが。

月並みの文化に関して三島由紀夫も、そういうことを言っているんですね。「月並みの雅にこそ、まさに日本文化の神髓があって、その「みやび」が一つの衛星の中心にあるからこそ、

周りに「わび」、「さび」などが発展していったんだ」というようなことを三島はいつていまして、月並みで一見、ずっと同じようなことをしていたり、変化があるようなものでもなく、そのような文化が母胎としてあるからこそ、いろんな文化を包容したり、立ち戻ることができたり、新しい挑戦できたりすることがあるのではないかと。また、近代以降、日本は時代を真に表象する美的原理の新しいものを生み出していないではないかとも三島はいつているんですね。そういうことを踏まえますと、日本の中で受け継がれてきた伝統そのものを見つめ直すことは、今後の日本文化をどう考えていくかにつながっているのではないかと。作家性とか独自性とか、個人の創作の発露ばかりが、今の世の中、かまびすしくなるわけですが、文化を歴史的に考えていく上では月並みな「型」のようなものにも重要な役割があって、そこが担っている部分を、もっと意識的に見ていく必要があるのではないのでしょうか。

深川さんの話を聞いて思いましたのは、「くずし字」というのを考えてみますと明治時代中頃までは、「変体仮名」も普通に読んでいた。それが「あ」というひらがなが、あの「あ」しかないという教育になっていった。これは恐ろしいことでありまして江戸時代以前まで先人が千年以上、ひらがなと漢字を使って「くずし字」を駆使して残してきた文献を、ある意味、完全に蓋をしてしまった。先人たちが残してきた記録を自分たちの目で読むことができないことの恐ろしさを、みなさん、感じたことはないのでしょうか。あたりまえに先人たちが残してき

たものを「くずし字やから、読めへんわ」ということで終わってしまう。限られた専門家以外は、先人たちが残してくれたものを直接的に読めないようになっていく。そういう意味でいうと、いくら日本の歴史が長いといっても、そのせつかくの歴史に向き合うことが難しくなってしまう。そう考えた時に、今の現代の技術を使ってでも、意味を知る、読めるようになることは大きなことではないかなと思うんですね。そういうことを今日、思った次第です。

福田 深川さん、いかがですか？

深川 100年前までは使われていた「変体仮名」が、すでに読めない人が普通だということになってきているのは、日本の文化が、まさに変わったことの一つを表しているのではないかと。それは大きなことだと思います。「型」という話がありましたが、日本の文字の「型」が大きく変わったことになるのではないかと。政策として教育を普及させるために便利だったということもあるかもしれませんが、何を優先するかということによって選択をしたのだらうなど。いい面もあったかもしれませんが、その当時は事情があったにせよ、現代は当時と事情が違います。いろんな技術が発達して、たとえば木簡とか古い史料を画面越しであるにせよ、直接、見られる。木簡が出てきたとかで見られる。歴史の教科書を見ると、印刷技術の発達によって、古い史料が写真付で見られる。古い文字に触れる機会が、明治時代よりも増えていると思いますので、教育も変えていくことも一つだらうなどと思います。デジタル技術だけではなく、「変体仮

名」という、一つの日本の文化の教育に関しても現代の我々が
できることが、もっとあるのではないかと思ったりした次第で
す。

福田 デジタル化によって文化関係のデータベースが、最近、使
われて木簡もデータベースがあります。ごらんになっている方
も少なくないのではないかと思います。和歌の場合も早くから
『新編国歌大観』という古典和歌を約45万集めたデータベー
スがあります。和歌の研究者はそれを検索しながら、大山さん
がご説明になった「本歌取り」を探そうとする。「本歌取り」
を見つけたら、うれしいというところもあります。今現在、私
たちがちょっと難しい昔の文化に触れよう、理解しようとする
時、最先端の技術は、かけ離れたものではなく、使い勝手のい
いものであるといえるのではないかと思います。会場の方々の中
にも「変体仮名を読めたらいいな」と私に語りかけてくださ
った方がいましたけど、「いいな」ではなく、すぐお勉強するこ
とが可能になる時代ですので、データベースなどツールも見ら
れるとよろしいですね。夏山さん、いかがでしょう。

夏山 深川さんのご研究ですが、一般の方は「くずし字」が読
めないと。私も知っている著名な研究者も「くずし字が読
めない」とおっしゃっていて「翻刻された本で研究するから
いいんだ」という方もいましたが、このようなツールが
使い勝手よく普及していくと、研究者だけではなく、一般
の方々も「くずし字」を読んで理解の広がりにつながる
のではないかと思ったりした次第です。

本日は古典籍の「くずし字」の解析というお話ですが、たとえば戦前の史料になると明治の途中まで「くずし字」を読めていた人たちが、戦前まで肉筆で書いた史料がありますが、作家の私信とか研究者同士の手紙のやりとりとか、研究史的に重要なものが書かれていたりしますが、それを読めないと埋もれていってしまうことがあり、そっちにも応用できる技術ではないかと思いました。古典籍は1000年たっても墨跡を解析していくことは、時間的な余裕があるかと思いますが、洋紙に万年筆で書いたものは褪色が激しいそうで、その方が急務なのではないかと思ったりもいたしました。

福田 そうですね。急に平安時代に飛ぶみたいなことはできませんが、ちょっと前の時代の手書きの洋紙に書かれている史料はペンの色が薄くなってしまったりして。そういうところからじわじわと、その時代、文化を継承してきた人の文化が何かというのを繙いていくこともまた、一歩ずつ重要になってくるかもしれませんね。

最後にお一人ずつ何かございましたらお願いしたいと思えます。末松さんいかがでしょうか？

末松 好きにお話をさせていただいた上に、よい質問をいただいて、嬉しく思っています。Zoom 視聴者からも5点質問がきておりまして、歴史的な知識を踏まえた研究仲間からの質問ではないかと思えます。

「外弁公卿が7人だったことが一回あったのは、何があったのでしょうか？」という質問ですが、誰だって気になりますよ

ね。私も気になって、この答えを出すのに3年かかったのですが、そのくらい文献を読み解かないといけない。後光明朝はさきにお話ししましたように、礼服の新調が検討され、結局は断念されたときでした。そのときに外弁公卿の先例を調べた記録がありまして、おそらく何着必要なかを検討したのでしょう。そこでは外弁公卿が7人や8人であった平安時代の記事があげられているのです。よって、人数のみが調べたそのままで実施されたというのが、後光明朝に1回だけ7人で行われた真相だったのではないかと考えられます。ついでながら、次の後西朝に紫に統一する形で礼服が新調され、このときは外弁公卿6人体制に則って行われています。もし後光明朝に新調されたならば、それを機に外弁公卿は7人体制に変化していたかもしれませんね。そうはならなかったことも、礼服新調が後光明朝ではなかったことを示していると考えてよいでしょう。また別の質問では、公卿の礼服として「麴塵が再興されたというけれど、これは天皇の色ではなかったですか？」とも。有職故実書にはそう書いてあるものもあるのですが、これも天皇が着てない時は特に許された者が、それを着てよいということがあるみたいです。ただし、紫も高貴な色なのですが、麴塵がより上位の色ということになっていたようで、宣命使は麴塵を着ています。絵図では紫を着た人が宣命使として描かれていますので、そこはまた史実との関係で要注意です。

さらに歴史を追求する、キャッチボールができる質問を5点もいただきまして、本日はどうもありがとうございました。

福田 それでは山科さん、お召し物もちゃんと着てきてくださいましたので、うれしゅうございました。それも平常の「お洋服」でしょうか？

山科 現代人は、つい「洋服」といっちゃうんですね。装束でございました。

福田 あら、いっちゃいましたね。

山科 これは公家の普段着のひとつで「小道服」といいます。「御大札の折には、どんなお役目をされたのでしょうか？」という質問がありました。装束は近代以降、大きな時代の変化を受けながらも伝承されて参りました。思い返せば令和の御大札は2019年秋ですから、ちょうどコロナの前でギリギリに行われたわけです。私の家は代々、宮中の装束の着付けをしてきましたので令和のご大札の折にも我々が東京に伺って天皇陛下はじめ侍従さん方に装束をお着付けすることを役割としてさせて頂きまして、御大札の「即位正殿の儀」とか「勅使発遣の儀」とか、いろんな儀式があるんですが、そこで装束が今でも現代に生き続けているわけです。それをどう伝えていくか、装束の着付け、和歌を詠むという創作活動もそうですが、物を残すだけではなく、無形の人の営みとしての文化も含めて、両方を伝えていかないといけないわけで、車の両輪のように考えるべきではないかと。いくらデジタル化が進んでいっても人の営みとして継承していかないといけないところがありますので手段として現代の技術も駆使しながら、いかにそれを守り伝えて発信していくか。

「データ化」ということでいいますと、先程、日記もご紹介しましたが、何百年、公家の日記で1000年くらい残っているものもあります。人類史の中では紙で残すことは燃えない限りは大丈夫ということは証明されています。ただデジタルデータになった時、電気がなくなったらどうするか、ハードが変われば読みこめないとか、パスワードがわからないと中身が見れず、どこにいつてしまったかわからない、というようなりスクがある。果たして「データ化」してデジタル化することで、ほんとにアーカイブができているかどうかとも考えないといけないのではないか。ガラケーで撮った写真なんか、どこかにいつて分かってなくなっていますでしょう。そういうことを考えていかないといけない。常に技術の進歩とともに検証し続ける姿勢も必要だろうと思います。そのへんのバランスを常に考えながら、目的として、後世にいかに文化をしっかりと伝え、発展させ、つないでいくかということですので。

福田 大山さんから。

大山 私も質問に答える形で。「和歌の型は日本文化全体に影響しているということですが、和歌に興味がなくても、その型を少しでも知ると、どのようないいことがありますか。たとえば日本絵画や工芸品の見方が深まるなどですか」。もちろん日本の他の文化と絡めて、より理解が深まるというのは、その通りだと思います。

私が大学で学生に授業をする時は、和歌を学んで一首一首の意味を知るというよりも、考え方や価値観を学んでほしいと

思っています。「より大きい人間になってね」と意識的に言っているんです。たとえば海外旅行に行った時、自分たちの文化にはないものを見て「この国で生きる人はこんな建物に住んでいるんだ、こんなものを食べるんだ、こんな考え方をするんだ」という、印象的な経験をして帰ってくる。すると、「アメリカではこうだよ」「インドではこうだよ」とか友達に話してみたくなるわけですが、それは自分が、違う価値観を得て成長したということだと思っんです。

海外にいけば「違う文化」だとわかると思いますが、古典文学の場合、それを考えてくれないんですね。「自分は日本人だから、古いものでも文字さえ読めれば理解できるんだ」。そうではなく、古典文化も異文化です。百人一首に「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」という歌があります。山奥で鹿が鳴きながら紅葉を踏んで歩いている、その情景さえ思い浮かべればこの一首を理解したことになるかという、そうではありません。まず和歌の中の鹿は、基本的に秋にしか鳴きません。それも、恋人を呼ぶために鳴く雄の鹿を詠むのがほとんどです。ちなみに鹿にはピィッと鳴く時とビュッと鳴く時があって、和歌の中の鹿は求愛の時のビュッとという鳴き方で鳴いているはず。そして、秋に鹿が鳴いている声を聞くということは、歌人たちの共通理解としては、一頭のさみしい雄の鹿がいる情景として理解されます。恋人がいれば鳴かなくていいわけですから。雄の鹿がひとり、さびしそうに鳴いている。それを、一人さみしい秋の夜を過ごしている男が聞くと、

「あっ、あの鹿は俺と同じように、ひとりさみしい思いをしているのか」となって、「声聞く時ぞ秋はかなしき」という感情が出てくる。そこまで理解して、やっと「型」を通した和歌の意味がわかってくる。

こういう風にこの和歌を理解した人が、あるとき奈良に行つて鹿が鳴いているのを聞いて、「あの鹿は恋人を呼んでいるのかな。そういえばなんだかさみしそうだな」と考えられるようになってくると、それまで見えていなかった世界が見えてくる。和歌を通して、自分の内面が広がった、拡張したということが実感できると思います。

和歌の学習というのは、現代語訳を暗記してテストで良い点をとることが目的なのでは全くなくて、いろいろな考え方を学んで自分の中に蓄えて、何か事あるごとに思い出して広いものの考え方ができる、広い感受性で物事を見ることができ、そういうことを目的とするべきものだと思います。それをぜひ学んでほしいという思いがあつて大学でも授業をしていますので、さきほどの質問にあつた、「和歌の「型」を知るとどういふ良いことがあるか」については、広くて新しいものの見方ができるようになる、というのが私の答えです。自分が広がる、というところと抽象的ですが、私はそういうふうに感じながら、普段街を歩いています。雀が鳴いていると「雀は和歌でこんなふう詠まれていたっけな」と考えてみたり。そうして歩いていると世界が楽しく、またそれまでと違って見えてきますので、そういう経験を皆さんにも、何か一つで良いのでしてもらえれば、と

いう気持ちがあります。

福田 「ああ、これが何々か」という感じね。「これが、あの風景なのか」という。「これが」という。

大山 「紫式部が和歌に詠んだのはこういうことなのか」という。

福田 そこに出くわした時のハプニングが心の豊かさにつながるように思いますね。深川さんから。

深川 私もご質問をいただきましたので。一つは「AI技術の進化により、人がつくる技術で新しい和歌をAIが生み出すことができるのですか」「散らし書きを、どの順序で読むかということは人間の判断では難しいように思いますが、AIでも可能になっていますか?」。AIはどんなことができるのかという趣旨の質問だと思います。

今日、説明が一つ抜けていたなと思ったんですが、AIとは artificial intelligence、人工知能の略ですが、コンピュータを使って処理することを最近、AIと呼ぶことが多いわけです。情報系の研究者からすると「AI」と「コンピュータでプログラムを組むとか何かを処理すること」は区別しております。AIという時には近年、「機械学習」という技術で成り立っている。「機械学習」というのは何か。単純です。データをたくさん与えて「データからパターンを抜き出さない」ということをやるわけです。抜き出した知識を使って何か新しい処理をする仕組みが、AIだと。今回は、その意味で使わせていただいた言葉です。そうすると単純なことしかやっていない。卑近な例で子どもが中国人の真似とか、何とか人の真似をする。特定の誰では

なく、知っている範囲から似たものを抽出して一つの型、素朴な型を抜き出して適用することが、AIがやっていること。

人がつくる和歌よりもAIは、すばらしい和歌をつくれるか。AIに、人がつくった和歌を与えていますのでAIは、それを使って知識を総動員して生み出す。可能性としては人がアッと驚くような和歌を生み出す可能性はあります。ただその背景に、人が、これまでに生み出してきた和歌、人のいろんな生活、和歌以外の文化的な知識をAIにデータとして与える必要があるかもしれませんが、総合的な結晶したものが、AIから出てくると考えれば、可能性は十分あるのではないかと。囲碁とか将棋の世界ではAIが活躍してプロの人に対して参考になる知見を与えてくれる世界がやってきました。画家が描いた、デザイナーが描いたアートグラフィックを、人間が言葉や文章を与えるだけでAIが制作をする。「こういう絵を描いてください」というと描いてくれる。AIの進歩が早すぎて、私も、ちょっと油断すると浦島太郎のようなことになるんですけど。そういう世界なので、近い将来、少なくとも私などよりもいい和歌をつくってくれるAIができるはずですし、「散らし書き」も「こういうふうに読むんじゃないですか？」と、きちんと過去のデータから提案してくれる。それが合っているかどうか、正しいかどうかは専門家の判断に委ねて、過去のデータと照合して検証しないといけないところがありますが、AIが役に立つ道具という意味では可能になってくるのではないかと考えております。

福田 最後は人間が判断しないとイケないということになるんで

しょうけどね。最後に夏山さん、よろしくお願いします。

夏山 ご質問に対する答えを伺ってしまして個人的には「外弁6人が7人になっている」というあたりにドラマ性を感じまして「その理由がわかったら小説になるんじゃないかな」と思ってみたり。山科さんの「衣紋道」の話を聞きまして「日記には何でも書いてある」と。「衣紋道の家を主人公にして衣紋道の事件簿という感じで、ちょっと考えてみたらどうか」と考えてみたりして想像が膨らんでおります。

宮廷文化という、本日のメインテーマに関して平安時代以降、現代に至るまで宮廷文化が伝えられてきている、残っているのはなぜだろうなと思ひまして、平安以降も鎌倉時代とか中世を通じて『源氏物語』でいいますと、鎌倉殿の源親行という『源氏物語』の重要な「河内本」を書いた人がいるんですが、そういう人が誕生している。中世になると『伊勢物語』や『源氏物語』をベースにした連歌の流行がありまして、そういうものが、ますます逆に求められている。近世になると土佐派の華麗な源氏絵とか、北村季吟の『湖月抄』という本も『源氏物語』の注釈書ですし、貴族に止まらず、庶民も町人のみなさんも読んでいた事実もありまして、中世近世を通じる武士の世でも、『源氏物語』だけに止まらない宮廷文化が求められてきたということだと思ひます。

「なぜ、それが求められてきているんだろう？」というのが不思議でして「衣紋道」の話にすると「位」で装束の色が違うということがありますが、一目見て身分がわかるように、とい

うところから出発しているのだと思います。中国から入ってきた制度ですが、それがずっと残り続けているのは、そうした合理性が日本の文化に合っていたからなのか。合理性は、恥をかかせたり、物事を荒立てたりするところを調和しながらやっていく精神に合うのかなと思います。争わない、荒立てないということを見ると中世の武士の世の中だと刀で人を斬ることが武士の仕事なのかと思いますが、そういう人たちの中でも、『源氏物語』に代表されるような宮廷文化が流行していた、求められていたことは、そういう人たちも物事を荒立てないで平安にやっていこうという文化を求める気持ちがあったのかなと思っています。宮廷文化がもつ文治性、文化、言葉や知恵でうまくやっていくという価値観が武士の人たちも渴望していたのかな、憧れていたのかなと思います。

小説業界の話を見せていただくと近年は戦国ものが一大ブームで下剋上が書かれたりしますが、下剋上は現代風にいいですと武力による現状変更のところがあるのかなと思いますが、高度経済成長期では一国一城の主になるということもありましたが、現在のような世界情勢を目の当たりにすると、下剋上の肯定的な面ばかり見ているののだろうか、武士の世でも宮廷文化が求められたということは平和な世の中、理想の世の中が、宮廷文化が、そういうものの象徴として求められたから、これまでも求められてきたのかなと思います。私の作品には女性たちが権力者の横暴に知恵の力で闘うという話がありますが、それが読者さまから「面白い」といっていただけるのは、社会に

において、その素地があるからなのかなと思います。最近の社会はフェイクニュースが問題になっていて、本日は宮廷文化のリアルという題ですが、本日のような、質の高い、リアルな情報に触れることができまして今後、大事になってくるのは、そういうものに触れて実際の姿を知ることなのかなと思いました。悪徳な公家が幕府転覆を狙っている、悪巧みをやるという時代物もあつたりしますが、そういうものではなく、リアルな情報に接して、その姿を知っていくことが大切なんじゃないかなと感じまして、私の作品も、その一助になればいいかなと思いました。

福田 ありがとうございます。それでは夏山さんの次回作を期待いたしまして、これをもちまして同志社大学人文科学研究所第103回公開講演会「京の都 宮廷文化のリアルー埋もれた「時」を解き明かすー」を終わらせていただきます。長時間にわたり、ご参加、ご視聴いただきまして誠にありがとうございました。それではまたの機会を楽しみに、本日は、ここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。